s. 6. 12. 15.）余は經の阿駄なるものを以て、此使徒 Adda に當て、從がつて明使を以てマニを言へるものと見んとす、もとより經に明使として記さるゝものは、其の意味頗ぶる廣汎にして、所によりて指す所同一ならずと雖、既に述べたるが如く、此節は神の世界創造に就て語れるものにして、之を明神の使と稱するマニが、其の門徒にして東方の教化を司りしアッダに說きたるものとして見るは、極めて妥當のことなるべければなり。

二　殘經の價値（其の一部の轉載）

西紀二百七十七年の頃、教祖マニが其の教の爲に一身を犧牲に供するや、教徒の多くは東オクサス河を越えて中亞の地に逃れ、サッサン朝波斯の滅亡に際して一たび歸國せしも、又た十世紀の中葉に於てマホメット教徒の迫害を蒙りて、再び東方に移りしが此間にも其宗教は支那回紇等を始め東方諸民族の間に宣布せられ、決して衰亡の狀態には陷らざりしが如し、然れども其經典は東西ともに今日に存するもの極めて少く、從がつて之が研究は實に至難の事業とせられたる所なり、近時支那新疆省の諸地に諸國の學術的探檢の行はるゝや、茲に初めて東方に行はれしマニ經典の發見せらるゝものありて、假令其の多くが斷片にして、而して今日既に死語に屬せる諸國語を以て記するものなりとは雖、之によりて漸次此の宗教の性質が闡明せらるゝに至りしは、實に學界の慶事なりとす。此の如くにして得られたる經典よりして考がふれば、マニ教＝少くとも東方諸國に行はれたる摩尼教が、佛教との關係極めて深きものなりしを知るべく、經典中に佛典を其の儘挿入せるが如き例も少きに非ず、此の如きは獨り西人の研究の結果によりて知り得べきのみならず、現に今余輩が研究中に屬せる、新疆出土の畏吾兒語の此經典中にも明